

防人の心情を述べる家持長歌三首の特質

森

斌

はじめに

兵部少輔大伴家持は、三十八歳の天平勝宝七歳二月に防人の心情の述べる長歌をうたう。巻二十にある四三三一番、四三九八番、四四〇八番の三首である。それぞれには合計八首の短歌も添えられている。家持がある感興により持続的に多作することはしばしばある。しかし、それは自己に直接の関わりをもたらず憂鬱な心情を創作で解放する時や、大伴池主という歌の良き理解者が居てのことであつた。なぜ防人の心情を詠む長歌を持続的に三首も詠んだのであろうか。

ちなみに市瀬雅之氏は、第一の長歌から第三の長歌までを、「ますらを」と「悲別の情」との二面から、「家持の関心が後者に移りつつある」と全体像を捉えて、四四〇八番を、「到達と完結とを旨指した歌」という。或いは松田聡氏

は、行路死人の長歌に触発され、表現方法をめぐる家持の試行錯誤から三首の長歌が誕生したとする⁽²⁾。

この論では、家持が防人に同情していたことから防人歌の理解を通して次第に共鳴していった悲別を、長歌三首から実証してみたい。

長歌創作と言うことでは、天平勝宝三年八月に越中から京師にもどつて四年目であつたが、その間に作品一首を残すのみである。越中時代と同様に、防人歌によつて久しぶりに創作の意欲がみなぎつた都の春愁歌人家持である。

一 悲別の対象

大伴家持は、国土の辺境を守備する防人歌を記録した。それぞれの国の防人部領使が纏め、官へ提出した百六十六首から、家持は拙劣な八十二首を除き、長歌一首と短歌八十三首を万葉集巻二十に載せた。さらに、この論では、昔

	父母	母父	父	母	妻・み	妹・こ	子供	不明	他のテーマ
遠 江	4325 4326			4323	4322 4327	4321		4324	
相 模	4328			4330				4329	
駿 河	4337 4340 4344 4346		4341	4338 4342	(4343)	4345	(4343)	4339	
上 総				4348 4356		4351 4353 4354 4357 4358		4349 4352	4350 4355 4359
常 陸						4363 4364 4365 4366 4367 4369		4372	4368 4370 4371
下 野		4376 4378		4377 4383				4375 4379	4373 4374 4380 4381 4382
下 総	4393			4386 4392	(4385)	4387 4388 4390 4391	(4385)		4384 4389 4394
信 濃		4402		(4401)			(4401)		4403
上 野						4404 4405 4407			4406
武 蔵						4414 4415 4418 4423			4419 4421
昔年の防人						4427 4429 4431 4432			4430
昔年相替防人						4436			
小 計	8	3	1	11	4	29	3	7	20

表一 誰との悲別か

年の防人の歌八首（四四二五から四四三二）と昔年に相替りし防人の歌一首（四四三六）も防人歌として参考の対象にする。但し、巻十四にある防人歌（三五六七から三五七一）と或いは防人の妻の作という長歌と反歌（三三四四、

三三四五）は、ここで言う防人歌から除いた。
家持が記録した防人歌は、天平勝宝七歳二月に交替のために難波に集合した防人に故郷を離れる時から難波に到着する間に作らせたものである。防人歌の献上は、遠江の史

生坂本人上に始まり、武蔵の部領防人使安曇三国が提出するまで、天平勝宝七歳二月に行われている。さらに昔年の防人歌は、おそらく三月に記録されたのであろう。詳しく言えば、防人歌と家持の長歌・短歌等は、二月六日が遠江国、七日が相模国、八・九日が家持、九日が駿河国と上総国、十三日が家持、十四日が常陸国と下野国、十六日が下総国、十七日・十九日が家持、二十二日が信濃国、二十三日が上野国、二十三日が家持、二十九日（二十日説もあり）が武蔵国であり、それぞれの国の防人歌と家持の歌が記録されている。防人歌のおおよそ半数は、家持によって拙劣ということから除かれてしまった。家持が編集できるのであるから、家持の個人的な関心から選択されている歌が防人歌なのであろう。

家持が拙劣として除いた歌は、どのようなものかを知るよしもないが、記録された歌から妹との悲別、父母乃至母との別離が大凡の内容である。誰との別れをうたっているか、ということで一覽表を2頁に示す。

その他は、上総に父の作が四三三七番、武蔵に妻の作が四四一三番、四四一六番、四四一七番、四四二〇番、四四二二番、四四二四番がある。また、昔年の防人は、妻の作が四四二五番、四四二六番、四四二八番である。

表にある（ ）は、四三三三番がみ（妻）と子、四三八五番が妻と子、四四〇一番が子とその母を一首にうたう。

この表では、防人にとつては「妻」と呼ぶことが例外的であり、普通「妹」という。妻と言えば子供が一对になる場合が一例ある。しかも子供は単独で登場することなく、「妻」と「み」「おも」と一緒にうたわれた。また、「父母」、或いは「母父」があつても、「母」はそれなりにうたわれている。「父」が単独で登場するのも一首である。

貴族と防人とは身分が違いすぎるのであるが、家持は防人歌を踏まえて長歌を三首も創作している。しかもその一方で家持独自のものの考え方があつた。それは例えば「ますらを」と防人をいい、配偶者を「妹」といわずにわざわざ「妻」と拘つていうなどが対比的な意味で良い例である。そして「妻別れ」という。

家持は、防人の歌に影響されつつ創作しているのであるが、誰との別れをうたうかと言えば、主に「妻」を取り上げる。それは防人の一般と異なる。防人は、一般的に妻との別れと言わずに、妹との別れをうたうのが一番多い。

表を参照にして、一番多いのは、「妹・こ」との別れであり、二十九例ある。次は「父母・母父」の十一例と「母」の十一例である。「妻・み」が四例、子供が三例（妻など）と

対でうたわれた）であり、不明が七首である。その他は、悲別を主題としていない防人歌であり、二十首である。以上から、圧倒的に防人は故郷での妹、父母、母、故郷の人との悲別をうたっていることが知られる。

類似した表は、水島義治氏が既に発表されている。⁽³⁾その表では、父母、父、母、妻、妻子、子、家族と分類項目がある。父母、父、母、が二十二首、妻、妻子、子が三十五首とある。しかし、妹と妻を弁別して考察することも意味がある。

表によれば、常陸、上野、武蔵などの防人歌は、家族の中でも主に妹との悲別をうたっている。歌数が少ないこともあるが、国による偏りが見られる。また、この二月の家持は、八日が防人の心情を述べる第一長歌を、九日が防人に同情して詠んだ短歌三首（四三三四から四三三六）を、十三日が難波賛歌として長短二首（四三六〇、四三六一）を、十七日が龍田山の花見短歌三首（四三九五から四三九七）を、十九日が防人の心情を述べる第二長歌を、二十三日が防人に同情した第三長歌を創作していて、長歌四首、短歌十二首という数である。

二 「東をのこ・東をとこ」の「妻別れ」

防人の心を詠む歌には、家持独自の歌語に「あづまをとこ」（四三三二）と「あづまをのこ」（四三三三）がある。

万葉集では、家持にのみ用いられていて、恐らく家持の造語であろう。この「東をのこ・をとこ」について、岩下武彦氏は「古代東国人の実績に基づいた造形」として理解を示している。⁽⁴⁾長歌と短歌にあるそれぞれ「をのこ」と「をとこ」を、家持は区別して意図的に用いているとも考えがたいので、ここでは同一の内容をいつているとする。その東男は「出で向かひ かへり見せず 勇みたる 猛き軍卒と」（四三三二）というのであるから、東戎とか荒戎とかいうさげすむ態度は防人に取らないで、東国の勇ましい軍人ということである。関東武士と板東武者の始まりである。そもそも防人歌をみるかぎりにおいて、ここで家持のいう「東」とは、防人歌を募集した地域を指すのであろうから、東海道が遠江以東、東山道が信濃以東であろう。東国とは人麻呂の高市皇子挽歌一九九番からは、美濃や尾張も東国になっているので、鈴鹿と不破の関より東の国を指したりすることもあり、また古事記では足柄峠から、日本書紀では碓氷峠から東の国を示していることもある。また、家持

自身も金を産出した陸奥国を東国といっているが、ここでは防人の故郷を指しているのであろう。

二月八日に作られた最初の長歌を引用する。家持は、防人歌に触発され、彼の造語と考えられる「東男」を使用して防人の別れを悲しむ心情をうたった。

追ひて防人が別れを悲しぶる心を痛みて作る歌一首（併せて短歌）

大君の 遠の朝延と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る
おさへの城そと 聞こし食す 四方の国には 人さは
に 満ちてはあれど 鶏が鳴く 東男は 出で向かひ
かへり見せずて 勇みたる 猛き軍卒と ねぎたまひ
任けのまにまに たらちねの 母が目離れて 若草の
妻をもまかず あらたまの 月日数みつ 葦が散る
難波の三津に 大舟に ま懼しじ貫き 朝なぎに 水
手整へ 夕潮に 梶引き折り 率ひて 漕ぎ行く君は
波の間を い行きさぐくみ ま幸くも 早く至りて
大君の 命のまにま ますらをの 心を持ちて あり
巡り 事し終はらば 障まはず 帰り来ませと 斎瓮
を 床辺に据ゑて 白たへの 袖折り返し ぬばたま
の 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき

妻らは（四三三一）

ますらをの鞆取り負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆
きけむ妻（四三三二）

鶏が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み（四
三三三）

題詞に「追いて」とあるが、伊藤博氏は「防人の歌の跡を追って」と丁寧な釈注で解釈を示している。⁽⁵⁾この引用した長歌は明らかに遠江と相模の十首に影響されているところからは、防人歌に追和した意味である。

全体が五十五句からなる長歌であり、構成は明確な段落が設けられていない。天皇は防人に東国の勇敢な兵士を任命になり、防人は母と妻に悲しい別れを告げて難波で軍団を率いていくが、丈夫の心をもつて任務に励み無事帰宅してください、と妻達は願つて長い日を持ちこがれています。防人と妻との別れをうたいつつ、妻が防人の無事の帰宅を待つ悲しい姿を長歌の叙情部たる結末部で描いている。最初の短歌においても、妻は夫が出かけたことを悲しむ。そして第二短歌では、夫である東男が長い間妻と別れることを嘆いている。これは、伊藤博氏が釈注で指摘するまず留まるものの悲しみがうたわれ、次に去る者の哀

しみがうたわれる「悲別歌」の構成である。⁽⁶⁾伊藤氏は、卷十二・三一八〇番から三二一〇番と卷十五・三五七八番から三五八八番とを、その例にして伝統という。家持も悲別歌の伝統を踏まえて短歌を作っている。

さて、外敵から国を守るため遠い朝廷である筑紫で東男が防人としての任に就いている。防人の心を「ますらをの心持ちて」というところに、「ますらを」を願った家持の心情が吐露されている。家持は二月十九日の長歌（四三九八）でも加えて「ますらを」をうたう。これも家持の理解と云うべきで、防人はかかる思想などは無縁である。たまたま勇ましい心をうたった歌もあるが、それでも丈夫などと防人がうたうことはない。⁽⁷⁾「ますらを」については、岩下武彦氏が簡潔にまとめている。万葉集で家持の「ますらを」は、健男としての剛強の男子の意味と大夫たる官人の意識があり、天皇のために勇み戦う勇士である。ところがこんな官人としての意識を防人が持っているはずもなく、それは家持の独断の考えであることは、小野寛氏などに夙に指摘されている。⁽⁸⁾

「ますらを」の用例を代表的な歌人で示せば次のとおりである。柿本人麻呂一例、人麻呂歌集四例、大伴旅人一例、山上憶良一例、笠金村四例、そして大伴家持十九例である。

山上憶良が詠った天平五年の、

士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名を立てず
して（五・九七八）

に天平勝宝三年に追和したのが、

勇士の名を振るはむことを慕ふ歌一首（并せて短歌）

ちちの実の 父の命 ははそ葉の 母の命 凡ろかに
心尽くして 思ふらむ その子なれやも ますらをや
空しくあるべき 梓弓 末振り起こし 投矢持ち 千
尋射渡し 剣大刀 腰に取り佩き あしひきの 八つ
峰踏み越え さしまくる 心障らず 後の代の 語り
継ぐべく 名を立つべしも（十九・四一六四）
ますらをを名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も語り
継ぐがね（四一六五）

右の二首、山上憶良臣の作る歌に追和す

の歌である。「ますらを」を家持がどう考えていたか、四年前の歌が参考になる。

「ますらをや 空しくあるべき 梓弓 末振り起こし 投矢持ち 千尋射渡し 剣大刀 腰に取り佩き」とあつて、明らかに語り継がれる武人の名声が家持の「ますらを」になつてゐる。とすれば、防人も辺境で国の守りをするのであるから、家持の捉え方からすれば「ますらを」の仲間である。武人であることがまず「ますらを」なのであるが、しかし妻も夫も別れが辛く嘆かれるというのである。題詞にある「防人の別を悲し」というのは、家にいて嘆く妻と丈夫として旅立つ夫のことであるが、これは二首の短歌でそれぞれをうたつてゐることからも理解すべきである。但し、長歌では妻が待つ悲しみに叙情の視点があつた。

次に「妻別れ」も家持独自の歌語である。そもそも防人は、妻を用いることが少ない。子供と対をなしてゐるときに妻を使うが、単独では遠江国の二例だけである。しかし、家持は、妻別れという。それは、防人の悲別の本質が家持にとつて妻との別れにあつたからである。「東男の妻別れ」(四三三二)、或いは第二の長歌「大君の 命畏み 妻別れ 悲しくあれど」(四三九八) とうたうのは、いかなる丈夫である男も悲しい「妻別れ」が耐え難いというのである。即ち、家持は、一番辛い別れが愛する妻との別れであるといつてゐる。その妻を長歌では、三つの行動としてとらえ

て描写してゐる。「斎瓮を 床辺に据ゑて 白たへの 袖折り返し ぬばたまの 黒髪敷きて」(四三三一) とは、一が斎瓮を床に据えて場を設定する、二が袖口を折る、三が黒髪を敷く、という行為である。とりわけ一と二は呪術的な夫の無事な帰還を願う事柄であろうが、三は閨の姿を連想させる。また、「若草の 妻をもまかず」ともあつて、女性の妖艶な姿は、防人がうたう、

筑波嶺のさ百合の花の夜床にもかなしけ妹そ昼もかなしけ (四三六九)

の「かなしけ妹」を連想させてゐる。

家持には、永別としての妻別れがあつた。天平十一年に亡妻挽歌をつくつてゐるので、死別である。或いは越中国の守として赴任した天平十八年から天平勝宝三年までの五年間では、最初の三年は妻大嬢と別離の状態であつたらしい。

家持は、「妻」という。一方防人の多くが「妹」と呼びかける。妹と呼びかけるのは、妻に限定できない場合の別れもあつたのであらう。しかし、それにしても防人達にわざわざ「妹」といわせるのは、一番悲しいのが「愛する妹」

との別離ということである。

家持は、妹を用いず必ず妻を対象にうたっているのも、二月八日の日付があるので、二月六日遠江七首（四三二一から四三二七）と二月七日相模三首（四三二八から四三三〇）までの十首に触発されたと時間的に考えられる。一方父母は、遠江二首と相模一首とでうたわれているが、家持は父母は切り捨て、母に触れつつ妻に描写を集中させている。さらに妻は、「障まはず 帰り来ませと 斎瓮を 床辺に据ゑて 白たへの 袖折り返し ぬばたまの黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき」であり、二首の短歌でも「別れを惜しみ嘆きけむ妻」「東男の妻別れ」と立場を変えつつ、故郷での悲別に焦点をあてている。これは、明らかに遠江と相模の防人歌に影響されつつ、その傾向と異にして、妻に焦点を当てているのである。

防人は、愛するものとの別離であるから妻も含みつつも、相聞で言う妹という対象になるのである。また、題詞に「悲しづる心」（四三三二）とあり、短歌にも「妻別れ悲しくありけむ」（四三三三）とある「悲し」も防人にはもっと切実な意味を持たされていた。

我る旅は旅と思ほど家にして子持ち瘦すらむ我が妻か

なしも（四三四三）

右一首は、玉作部廣目

人生で一番辛いのは、家持は愛しい妻との別れであった。防人は、かなしい妹との別れであったが、生活苦がさらに加わった妻のかなしい存在もあった。

三 防人の悲別

防人が情の為に思ひを陳べて作る歌一首（併せて短歌）

大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ますらを
の 心振り起こし 取り装ひ 門出をすれば たらち
ねの 母搔き撫で 若草の 妻取り付き 平けく 我
は斎はむ ま幸くて はや帰り来と ま袖もち 涙を
拭ひ むせひつつ 言問ひすれば 群鳥の 出で立ち
かてに 滞り かへり見しつつ いや遠に 国を来離
れ いや高に 山を越え過ぎ 葦が散る 難波に來居
て 夕潮に 舟を浮け据ゑ 朝なぎに 舳向け漕がむ
と さもらふと 我が居る時に 春霞 島廻に立ちて
鶴がねの 悲しく鳴けば 遙々に 家と思ひ出 負ひ
征矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも（四三九八）

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき夕は国辺し思ほゆ
(四三九九)

家思ふと眠を寝ず居ればたづがなく葦辺も見えず春の
霞に(四四〇〇)

右、十九日に兵部少輔宿祢家持作る。

防人の代作をしているのであるから、当たり前といひながら、そこには、「たらちねの 母掻き撫で 若草の 妻取り付き 平けく 我は斎はむ」と具体的な母と妻の描写と加えて「ま幸くて はや帰り来と ま袖もち 涙を拭ひむせひつつ 言問ひすれば」という無事を祈る妻の言葉が加えられて記されている。

天皇の命令に忠実な丈夫として、そして故郷を離れた防人の嘆きとして、防人の心情に注目して家持はうたう。しかも、「妻別れ」には、丈夫の心が必要であるという。この長歌では、悲別には母と妻が登場している。母は、かき撫でたという。うら若き妻は、両袖で涙をぬぐいつつ「平けく 我は斎はむ ま幸くて はや帰り来と」と会話で願いを語にかけている。この長歌でも悲別の中核は、やはり妻別れにある。後ろ髪を引かれながら遠い難波にやつて来たといひ、最後は故郷を思い出し「負ひ征矢の そよと鳴る

まで 嘆きつるかも」とは、防人の妻への嘆きである。

我が母袖もち撫でて我が故に泣きし心を忘れぬかも
(四三五六)

右の一首は、山辺郡の上丁物部平刀良

葦垣の隈処に立ちて我妹子が袖もしほほに泣きし所思
はゆ(四三五七)

右の一首は、市原郡の上丁刑部直千國

引用した防人歌二首は、「ま袖もち 涙を拭ひ むせひつつ 言問ひすれば」という吾妹子の泣く姿として、袖をもつて、或いは袖もびつしより濡らして泣く表現として長歌にも取り入れている。

ところで、第一長歌最後の句にも「愛しき妻らは」(四三三二)とあり、その短歌にも「東男の妻別れ」(四三三三)とあるが、悲別はあくまで妻別れが中心であっても、この防人に同情してうたった第二長歌では、故郷から遠く離れた防人の難波での心情に重きを置いている。さらに、短歌では、明確に故郷を思い眠れない不安をうたう。

第一長歌で愛しい妻との別離に主眼をおいていたことが、この第二長歌では、今現在が難波に居るとして、故郷を去

る時から回想している。その回想からは、母の愛情を示す行動、妻の安全を願う愛情ある言葉が選び出されていて、さらに難波の光景が悲しみを深めている。

まず最初の長歌で十八句もついでして防人として任命されたことをうたっていたが、今時は半分以下の八句で防人として故郷を門出したという。また第一長歌では、四句で母と妻との別離をいうが、第二長歌では十二句を用いて、母に頭を撫でさせ、妻に無事を祈る言葉を語らせている。さらに違いは、第一長歌が故郷の妻に焦点をあてて叙情を展開させているのに対して、第二長歌が家族にも思いを至らせていることである。

従って、第一長歌の創作から、九日（実際に奉った日）が駿河と上総、十三日が家持、十四日が常陸と下野、十六日が下総の歌が献上され、さらに作られている。それが影響していることは、「たちねの 母掻き撫で」は、以下の二首が参考になる。

父母が頭掻き撫で幸くあれと言ひし言葉ぜ忘れかねつ
る（四三四六）

右一首は、丈部稻麻呂

我が母の袖もち撫でて我が故に泣きし心を忘れえぬか

も（四三五六）

右一首は、山邊郡上丁物部乎刀良

次に「若草の 妻取り付き」は、

大君の命恐み出で来れば我ぬ取り付きて言ひし児なは
も（四三五八）

右一首は、種淮郡上丁物部龍

更に「平けく 我は斎はむ ま幸くて はや帰り来と」
は、

庭中の足羽の神に小柴刺し我は斎はむ帰り来までに
（四三五〇）

右一首は、帳丁若麻績部諸人

足柄の み坂賜はり かへり見ず 我は越え行く 荒
し男も 立しやはばかり 不破の関 越えて我は行く
馬の爪 筑紫の崎に 留まり居て 我は斎はむ 諸は
幸くと申す 帰り来までに（四三七二）

右一首は、倭文部可良麻呂

に依つても防人歌の影響が知られる。

以上影響した歌は、すべて第一長歌を作った後に献上された駿河、上総、常陸の防人歌である。第二長歌を創作する動機には防人歌に触発されたことは、これらの表現からも認められる。

また四三九八番の長歌は、第一長歌と構造は一緒であるが、妻の嘆きから「ますらを」である防人の嘆きに焦点が移っている。その意味では、第一長歌で妻の嘆きをうたうのは、残されたものの哀しさであるから、「悲別歌」の最初にうたう伝統に適う。即ち、第二長歌が出かける防人の悲しみをうたうのであるから、二首の長歌もその構成は「悲別歌」の伝統に法っている。「ますらを」家持にとつて全く縁がなかったのは四三八二番である。

布多富我美悪しけ人なりあたゆまひ我がする時に防人に差す（四三八二）

作者は、下野国那須郡の上丁大伴部広成である。那須郡は、現在の栃木県那須郡、さらに大田原市、黒磯市をいう。上丁は、一般兵のことである。解釈の問題箇所は、初句にあるが、意味不明とするのが正しい。しかし、『全註釈』は、

「布多」を下野の国府のあつた都賀郡の郷所在地であり、「ほがみ」を長官として、下野国守の意とする⁽⁹⁾。第三句の「あたゆまひ」も賄賂、潔斎などの解釈もあるが、多くの注釈書は「急病」の意としている。即ち、「あた」が急の意で「ゆまひ」が「病」の方言とする解釈である。

ちなみにこの歌の本質を単なる防人が愚痴としてうたったか、はたまた直接的な怒りを詠んだものとするかでは、研究者の理解にも相違がある。一般的には怒りをうたつているとする。防人の任命が国守の仕事であるならば、初句の布多の長官、即ち下野国守と解する全註釈が最も適當である。批評の対象が不明であっても、とにかく急病にも関わらず防人に任命されたことへの怒りを「悪しけ人なり」とうたつているのであるから、大伴家持がこの歌を拙劣とせずに採用したのは、丈夫官人として英断である。

四 「うつせみの世の人」

防人が別れを悲しぶるの情を陳ぶる歌一首（并せて短歌）

大君の 任けのまにまに 島守に 我が立ち来れば
ははそ葉の 母の命は み裳の裾 摘み上げ掻き撫で
ちちの實の 父の命は 栲づのの 白ひげの上ゆ 涙

垂り嘆きのたばく 鹿子じもの ただひとりして
朝戸出の 悲しき我が子 あらたまの 年の緒長く
相見ずは 恋しくあるべし 今日だにも 言問ひせむ
と 惜しみつつ 悲しびませば 若草の 妻も子ども
も をちここに さはに囲み居 春鳥の 声の吟ひ
白たへの 袖泣き濡らし 携はり 別れかてにと 引
き留め 慕ひしものを 大君の 命恐み 玉梓の 道
に出で立ち 岡の崎 い廻むるごとに 万度 かへり
見しつつ はろはろに 別れし来れば 思ふそら 安
くもあらず 恋ふるそら 苦しきものを うつせみの
世の人なれば たまきはる 命も知らず 海原の 恐
き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり巡り 我が来る
までに 平けく 親はいまさね 障みなく 妻は待た
せと 住吉の 我が皇神に 幣奉り 祈り申して 難
波津に 舟を浮け据ゑ 八十梶貫き 水手整へて 朝
開き 我は漕ぎ出ぬと 家に告げこそ (四四〇八)
家人の斎へにかあらむ平けく舟出はしぬと親に申さね
(四四〇九)
み空行く雲も使ひと人は言へど家づと遣らむたづき知
らずも (四四一〇)
家づとに貝そ拾へる浜波はいやしくしくに高く寄すれ

ど (四四一二)

島陰に我が舟泊てて告げ遣らむ使ひをなみや恋ひつつ
行かむ (四四一二)

二月二十三日、兵部少輔大伴宿祢家持

家持は第二長歌を作つて四日後に第三長歌 (四四〇八)
を創作した。最初の長歌は、防人の悲別といいながら、そ
れは妻が夫と別れることを主に描いた。ところが、第二長
歌では、防人に主体があつて、その別れなければならない
悲しい心を描いていた。第一と第二では、描く姿の主体が
異なり、悲別歌の伝統を踏む。しかし、第三の長歌は、題
詞に「防人が別れを悲しぶるの情」をうたうとあるので、
防人が主体である。第二の長歌には「防人の情と為り」と
あることからほぼ立場は近い。とりわけ長歌の前半部は、
同じ構成であると言つていいほどである。

第二長歌 (四四二二)

大君の 命畏み

取り装ひ 門出をすれば
たらちねの 母搔き撫で

第三長歌 (四四三一)

大君の 任けのまにまに

(大君の 命畏み)

鳥守に 我が立ち来れば
ははそ葉の 母の命は

(み裳の裾 摘み上げ掻き撫で)

若草の 妻取り付き

若草の 妻も子供も

むせひつつ 言どひすれば

今日だに 言どひせむと

とどこほり かへり見しつと

万たび かへり見しつと

以上は類似表現を指摘した。ほぼ構成も類似しているが、長歌の収束部はそれぞれ異なる。第二長歌は、遙かな故郷を思い出して嘆くが、第三長歌は、父母と妻が無事でいてほしいと防人が住吉の神に祈って、出発したと伝えて欲しいという。しかし、何故に類似する長歌を二首もうたったのであろう。

表面的に類似した創作動機であっても、第三首目を作るために心境の変化があった、と考える。歌の言葉で言えば「ますらを」が「うつせみの 世の人」となったことである。

即ち、第三長歌の特質は、まずそれまでの家持と異なる丈夫の喪失にある。家持は、防人歌を取捨していく過程で、防人が丈夫として使命に燃えているわけでないことを自覚せざるを得なかった。それが第三の長歌に丈夫をうたわせなかったことで知られる。もう一つは、「妻別れ」とも言わなくなったこともある。

家持は、この長歌で意外な展開を見せている。防人歌の一般的傾向をよく踏まえているのであるが、とりわけ突出しているのが父の存在である。次には、無事に帰国したいと願うのではなく、長歌で無事に帰国するまで親と妻が平穩であれと祈ったというのも、珍しい。但し、子供とその母(妻)は、防人歌でも一対で登場しているが、父と母、そして母子に触れたので、防人にうたわれた誰との悲別という意味ではすべてに関わりをもつ長歌になった。即ち、防人歌でうたわれた家族は総て登場したことになるが、ここでは第二長歌を誕生させてからは、信濃と上野の防人から歌が集まっているので、子供と母をうたうのは、信濃の防人の

韓衣裾に取り付き泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして(四四〇一)

右一首は、國造小縣郡他田舎人大嶋

の影響が強いのであろう。加えておみやげをうたうのは、駿河の防人歌(四三四〇)にもあったし、家持も二月十七日に木屑がもしも貝であればお土産(包み物)にしたいと願う歌(四三九六)がある。

父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来まで
(四三四〇)

右一首は、川原虫麻呂

堀江より朝潮満ちに寄るこつみ貝にありせばつとにせ
ましを (四三九六)

さて、小野寛氏は、第三番目の長歌を防人の悲別の心情をうたう「決定稿はなつた」という⁽¹⁾。しかし、諸注釈書の評価は、この長歌に対してはおおむね低い⁽²⁾。その最大の根拠は、防人にたいする同情が防人の立場に徹していないところにある、とする。『私注』は、作者が防人に成り代わって心情を述べることを「安易」であるという。『全註釈』は、叙述が詳しくなつていてもとしているが、評価は厳しい。これに対して『評釈』は好意的である。また、『釈注』は、やや好意的である。

家持が防人に同情した長歌を詠んだのは、防人の歌に心惹かれたからである。第二長歌(四三九八)は、「防人の情と為りて思ひを陳べて」とあり、最初の長歌よりも別れそれ自体が主体になっている。即ち、故郷を出発するときの情景描写が克明になつていて、初句から第二十句までが故郷での別れである。妻は当然として、母までも加わり、母

が頭を撫で、妻がとりすがりしつ、「ご無事でお帰るくさい」という科白が圧巻である。短歌(四四〇〇)にも「家おもふと寐を寐す」とあり、長歌の結びにある「負征矢の そよそよと鳴るまで 嘆きつるに」が故郷にある「家」であり、その別れた母と妻である。

第三長歌(四四〇八)は、さらに国での別れが委細であり、徹底的に拘る。三十八句を用いているが、これまで登場しなかった父が加わつた。さらに父の科白が語られている。科白を取り入れたのは、第二長歌に描かれた妻の表現の延長上にあるが、この長歌で家持が考えている防人の悲しみとはということの最終的な判断が家族全員の参加を促せたのであろう。

長歌の構造も、天皇の命令で、島守にやつて来た、そして故郷では父母、妻と子供との悲別があり、難波までの道すがらやつて来たが、——難波では親も妻も無事でいて欲しいと住江の神に祈つたし、船出したと家に伝えて欲しい——という収束部が明確に異なる。防人に選ばれた男の「うつせみの 世の人なれば」という姿として、防人が帰宅するまでの長い間になる家族の無事を、本人が祈っている。この帰宅まで防人の無事を家族が祈る、或いは家族の祈りを期待する防人がいた。しかし、家持は防人が家族の無

事を帰郷までと祈るのである。この優しさは、貴重である。家持は、防人歌を掲載する際に拙劣なものには除いたが、掲載された歌は徹底的に学んでいる。その結果は、誰を対象に悲別をうたうかと言え、防人歌でたった一首父との別れをうたった、

橘の美袁利の里に父を置いて道の長道は行きかてぬか

も（四三四一）

右の一首は丈部足麻呂。

がある。

しかし、この歌にうたわれた父とは、家持は異にしている。即ち、「鹿子じもの ただひとりして 朝戸出の 悲しき我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ずは 恋しくあるべし 今日だにも 言問ひせむ」と会話を呼びかける父がいる。防人歌には、父母、妹などが一般的な対象であるが、ここにあるのは類例を見せない父の姿である。会話で交わす愛情表現を指摘して、中西進氏は、「父の愛だ」とい¹³う。さらに子供は、母（妻）と共に詠まれるのが防人歌であるが、家持も同様に子供を独立させていない。さらに長歌の後半では、父母と妻が再びうたわれた。両親も妻も再

び会う日まで無事でありますようにと祈るのは、防人自身である。無事帰還するまで、親に、妻に身を清めていてほしい、と防人が願うのと異なる。その意味ではこれまでで一番個性的である。そして、防人の心に成り代わってうたったのが第三長歌である。

また短歌に「家づとやらむ」（四四一〇）「家づとに貝ぞ拾へる」（四四一二）とあるが、難波といえ「恋ひ忘れ貝」が連想される。お土産の白玉が防人歌（四三四〇）にもうたわれているのであるから、難波での詠歌であれば、自然な発想である。

家持の三首の長歌は、最初は妖艶な妻に主眼があり、二番目は丈夫防人自身である。万葉の伝統では、二首の長歌で完結させる方法もあった。しかし、第三首目の誕生は、出発した防人が故郷の家族を案じる歌をうたうのは、防人が「ますらを」と呼ばなくても、武人の東男であり、家族を大事にする人間であることに防人の歌から気がつき、あたらしい感動が家持に生じたためと考えた。

結 び

家持の心情は、防人に同情しながら深化している。それは、防人歌を収集して読み続けることで、防人の心を次第

に深く理解していったからである。最初の意欲的な試みは、一番の長歌四三三一番に防人を丈夫として、さらに「東男」と造語で呼び、「妻別れ」などの造語を用いて悲別の本質を表現した。しかし、最終的には、防人を丈夫とすることがない。また、心境の深化は、天皇の命令で防人になって任地に行くために故郷の父・母そして、妻と子供との長い別れだとして第三長歌でうたう。そこにあるのは、防人歌の全体的な理解に基づく家持の到達である。石や草木でもお土産になるのであるが、難波で有名な貝を土産とすることととりたてて貴族的なこととも思われない。

第三長歌は、二月二十三日に作られているが、その後武蔵の歌が十二首、昔年の防人歌が八首なども編集されている。それらの影響があったと家持歌に具体的に指摘できないので、武蔵の防人歌などは、創作の参考というよりも、歌集を編集する興味で終わったのであろう。

長歌は防人の歌に触発されてうたった。とりわけ三首もの長歌をうたったのも偶然ではない。第一と第二は、悲別における送る者と送られる者という立場から二首で一对の発想であり、第三首はあらたに「妹別れ」と「現身の世の人」として送られる防人の立場で創作された。そこに示された家持の優しさは、防人が故郷の家族の無事を祈る、と

いうことに象徴されている。また、第三長歌は、防人歌に一番近い発想を取り入れられていたところに、家持の意欲が認められる。

(注)

(1) 「防人の心を詠む歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 大伴家持二(第九巻) 所収』)

(2) 「防人関係長歌の成立」(『早稲田大学国文学研究』一一四号)

(3) 『万葉集防人歌全注釈』四六八頁

どのような分析で表を作成するか、ということでは、今回はイモとツマを分けてみた。それは、中西進氏が「妻別れ」に注目しているからである。即ち、「家持は防人の立場に同情していても、『妻』についていえば、ことばづかいのうえで第三者的である。(略) 方言で話さないで、標準語で語る態度」(『大伴家持 もののふ残照』(第六巻) 一五五頁) という。また、菊川恵三氏は、妻と妹について、「男女二人だけの直接関係を基盤とするイモ」と「社会的関係を軸とするツマ」(『人麻呂歌集七夕歌の呼称と意義』(『万葉集研究』(第二十集) 所収) と言っている。

(4) 「万葉集のあづまを」と(『国文学解釈と鑑賞』第六十七卷十一号)

(5) 『万葉集釈注』(第十卷) 四五三頁 一追ひて

(6) 注(5)に同じ。四五三頁

(7) 注(4)に同じ。

(8) 「大君の任のまにまに——家持の『ますらを』の発想」

『大伴家持研究』所収) 一二七頁

(9) 『万葉集全註釈』四三八二番 釈

(10) 足柄の み坂賜はり かへり見す 我は越え行く 荒し

男も 立しやはばかり 不破の関 越えて我は行く 馬の

爪 筑紫の崎に 留まり居て 我は斎はむ 諸は 幸くと

申す 帰り来までに(四三七二)

右一首は、倭文部可良麻呂

防人歌で唯一の長歌である。長歌の解釈で「諸は 幸

くと申す」という箇所は、防人の無事を祈るのか、留守の

家族に防人が平安を祈るのか、説が分かれる。この解釈に

よつては、家持と倭文部可良麻呂が留守の間家族の平穩を

祈っていたことになる。

(11) 「防人との出会——防人の心情を陳べる三作——」(『家持

を考える』(上代文学会編万葉夏季大学十四) 所収)

(12) 『万葉集私注』は、四四〇八番の標語で「至つて感興の乏

しい平凡な作」という。

『万葉集全註釈』は、四四〇八番の作者及作意で、防人

の立場で創作することを「結局そうした方法が安易」とし

ている。

『万葉集評釈』は、四四〇八番の評で、「前の長歌二首

に比較して『語統きも流麗で、落ちついて心を尽している

上では、遙に勝つてゐる」とする。

『万葉集私注』四四〇八番から四四一一番で、第二長歌よりも作品として劣るが、「いかにも最終陣らしい構えを見せている」とする。

(13) 『大伴家持 もののふ残照』(第六卷)「父への思い」一九

三頁